

■ フォトエッセイ ■

# TEHRAN NOBODY

写真・文 岩崎 葉子

Yoko Iwasaki



いったいどこへ行ってしまったのか。  
人は、車は。みんなが示し合わせて、いっ  
せいにどこかへ消えてしまったかのよう  
な、SF小説さながらの空っぽのテヘラ  
ンである。

イランの全人口七〇〇万あまりのう  
ち、およそ八〇〇万が集中する、首都テ  
ヘラン。公共交通機関の整備が遅れ、自  
家用車と白タクの溢れるテヘランは、淀  
んだ空気のむこうに、山並みがかるうじ  
てその稜線を覗かせる、世界に冠たる大  
気汚染都市でもある。交通渋滞はいまや、  
ほんの数キロ離れた場所へも車で移動し  
ようとすれば小一時間もかかりかねない  
ほど深刻だ。テヘランの日常は、排ガス  
で煙幕が張った高速道路に折り重なるよ  
うに連なる車の列、いらだつくラクシヨ  
ン、不機嫌な警官のおざなりな交通整理  
…そしてそれにすっかり疲れきった市民  
の怒号に満ち満ちている。

しかしこの忌まわしい喧噪のテヘラン  
こそが、じつは幻なのではないかと思わ  
せてくれるのがイランの新年「ノウル  
ズ」である。

新年の二日目。ふだんは車の波がとめど  
ない大通りもこのとおり（高松洋一撮影）





テヘランのシンボル、すずかけの樹が芽吹き始める。春の到来



新年直前の八百屋の店先。新年飾りの蠟燭や縁起ものが売られる

イランの暦では、三月の春分の日をさかんに年が明ける。まさしく新春の到来だ。人々は新年の飾りのために、青々と伸びる草の鉢と小さな金魚を買い、蠟燭をたて、硬貨やりんご、にんにくなどいくつもの縁起ものをのせた皿を並べる。

そして長い長い「お正月」休みが始まる。三が日どころではない。えんえんと休みが続く。世間がようやくのっそりと動き始めるのは、新年の一二日目、家族総出で戸外のピクニックを楽しむノウルーズのハイライト行事「スイーズダ・ベダル」を迎える頃だ。今年の年始は、官公庁などの公的な休みは五日間とされていたが、やれ「故郷で従姉妹の息子の結婚式があつて」だの、やれ「帰りの飛行機のチケットが取れなくて」だのと、実際に職員が出そろうのはずっとあとになってのことである。

お役所はもちろんのこと、パン屋も、ブティックも、スポーツクラブもみなお休み。「初売り商戦」もなく「福袋」もない。こんなに休んで干上がらないものかとはなはだ疑問だが、ペルシア商人の末裔たちはしごく悠然と休んでいる。おそらくいまや世界で最も商売気のない人々だ。職を求め、教育機会を求め、はたまた政治的野心をもつて全国からぞくぞくとテヘランへ「上京」してきた人々は、この時期になると、大都会のうんざりするような雑



道はたで新年飾り用の青草と金魚を売る少年

踏をいともたやすく見捨て、嬉しげに自然豊かな郷里へと帰って行く。あるいはテヘランには見るべき歴史もないとばかりに、エスファハーンだシーラーズだと世界遺産級の古都へと観光に旅立って行く。

そしておおかたは、年が明けてからたっぷり二週間ほどたつまでは、ゆめゆめこの街に戻って来ようとは思わないのである。

かくして、誰もいなくなったテヘラン。正確には、何代も前からテヘランに住んでいるほんのわずかな「テフルーニー（テヘランっ子）」とその家族、職務上どうし

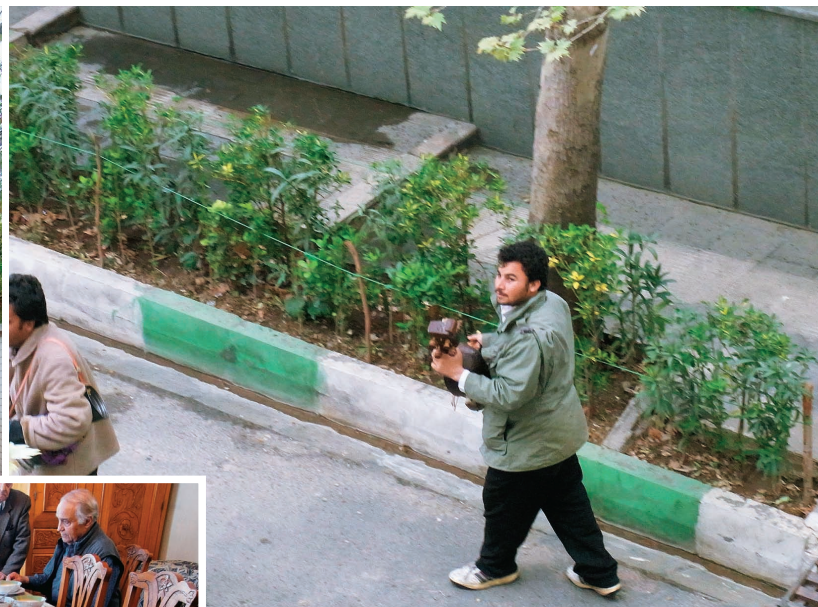


お菓子屋の店先の新年飾り。ペルシア語のSで始まる縁起ものを7つ並べるのが習い





いつもは路上駐車車の車輦が道の両側に  
びっしりと並び、歩くのも難しいのだが  
(高松洋一撮影)



年が明けると、ご祝儀をもとめて路地に楽隊が登場する (高松洋一撮影)



テフルーニーの家では新年の祝い。  
森閑としたテヘランで水入らず



蒼穹の下、艶姿をみせたゴレスタン宮殿

でもないなければならない気の毒な清掃局員や消防署員、そして(筆者のような)すべての施設から閉め出されて行き場を失った外国人などがいるくらいなのである。しかし、人々は知らないのだ……誰もいないノウルズのテヘランの素晴らしさを。

アルボルズ山脈の裾野に位置し、もともと風光明媚で水のよい土地であったテヘランは、一八世紀末にガージャール朝ペルシアの首都となった。一九世紀のテヘランを描いた絵画や当時撮影された写真には、雪をいただく山並みを遠景に配し、涼やかな木陰に瀟洒にたたずむ街の様子が残されている。それはちょうど、例の幕末の愛宕山から一望された江戸の町並みを彷彿させ、すべての現代都市の避けがたい運命とはいえ、今日の無遠慮で垢抜けしない成長ぶりがつくづくうめしい。

テヘランの旧市街には、かつての宮殿が博物館となつて公開されている。この付近もふだんであれば、近接する大バーザールや官庁めがけて押し寄せる積載量制限無視のトラック、バイク便の暴走オートバイ、すし詰めの乗客をよるよると運ぶ路線バスなどでごった返している。通りは濛々と舞い上がる粉塵に目鼻をふさがれるようなありさまなので、よもやすぐそこに壮麗な宮殿が鎮座しているようとは夢にも思われぬ場所だ。

ところが、どうであらう。ノウルズに入って人も車も消え失せたテヘランの空は、さらに数日のあいだ瀟々と降り続いた雨にも洗われて、ガージャール朝時代さながらに澄みわたった。そこへ立ち現れたかの宮殿は、紺碧の、まさにパーシャ・ブルーの空を背負っているのではないか！





山が近くに見えるノウルーズの朝（高松洋一撮影）



誰も見ていなくとも、花は美しく  
咲き競っている



新年のために花壇が植え替えられても、愛でる人のいない公園

はなすおの濃紫の花にアルボルズの白い峰、この出来すぎた絵はがきのような景色は、さだめし宮殿のテラスからガーシャール朝の王ナーセロツディーン・シャーも眺めた、いにしえの春のテヘランに似ていることだろう。

ノウルーズの人ばらいと天候のおかげさまで、ことによつては一〇年に一度も見られるかさささだかではないほど美しい、静寂のテヘランを見た。この「秘境」の存在に人々が気づきはじめ、ノウルーズをのんびりテヘランで過ごすなどという野暮なブームが到来しないことを、こつそりと祈るばかりである。

いわさき ようこ／アジア経済研究所 在テヘラン海外調査員

専門はイラン経済制度史。フィールドワークに史料・文献調査を加味し、イラン独自の経済慣行やシステムを分析する。著書にフィールドワークの経験をまとめた『テヘラン商売往来—イラン商人の世界』がある。